総評　2024年８月分　杉本真維子

「聞き返しても／もう言ってくれないんでしょ／耳から　音　戻す　方法」小川いなせ（茨城県）
聞いてしまったことは、聞かなかったことにできません。その理不尽さへの抗議が、三行目の短く区切った発音に表れているようです。目には瞼がついているのに、なぜ耳には栓がついていないのでしょうね。でも、どうやらこの相手は耳に栓をしているのではないかしら。言ってくれないのは聞こえていないからかもしれず、最終的には語り手に孤独が際立つのです（そして誰でもこれくらい孤独なのだと思えます）。

「平明なことばで暮らす夏の菊」中井　望賀（東京都）
ここにあるうらやましいほどの慎ましやかな生活は、人としても、菊としても読めます。命そのものが謳われています。

「やるせない。／オクラぬむっと。からむ夜。」蝸牛（奈良県）
「ぬむっと」というオノマトペに注目。オクラのねばり、からむ、夜。内に重たく沈みこむようなイメージのなかで、「からむ」がほんの少し外的なトラブルを匂わせます。喜怒哀楽の四つでは表せるはずのない感情のことを思いました。

「海溝の診察に行く聴診器」小里京子（北海道）
このとてつもない、コントロール「外」な感じに惹かれました。人の手がまるで届かない。でも他人事ではない。「行く」という動詞をもつ「聴診器」の正体は何でしょう。

「空がない星で読まれる人生訓」平松　泥沸（兵庫県）
面白いです。なぜか生まれ変わったあとのひとときを想像しました。意味はわかりませんが、これを机上の空論的な意味で読んだらつまらない、ということはわかります。

「霜の夜の誤字に修正液厚く」杢いう子（佐賀県）
比喩ではないともいえます。霜の夜はほんとうにこうなるのかもしれません。そのリアリティが素晴らしいです。静まり返った夜のなかで、ぶあつい霜のような修正液がさりさりと音を立てそうです。

「にぎりしめたままの形で／展示されている／雪、」こはくいろ（大阪府）
このかたちそのものが展示された雪。「にぎりしめたままの形」は目には見えませんが存在するものだと思えます。それこそが、溶けて消える雪をこの世に留めているものでしょう。

「この部屋を／明日には出ていく私／靴下だけ干す」池田　遥（大分県）
このように「私」を他人事みたいに離れたところが見ている目が、書き手には必要でしょう。

「日は縦に落ちて水着を絞りきる」宮﨑　莉々香（神奈川県）

時間が視覚化されています。夏の濃い影が水着の絞り跡に残っている気がします。

「部屋まで響く夏の号砲／奥まで届く殺虫剤」楠木静梨（栃木県）
一行目の「部屋まで」を、二行目が引き継いで、「奥まで」といっています。つまり、夏の号砲が奥まで届く、という意味が生まれます。二重になった奥行は横への広がりですが、それが夏空の縦の広がりを喚起し、巨大な号砲が響き渡ります。

「照明には羞恥心がないのだ／だから嫌い」水木貴奈子（奈良県）
煌々としたあかりの無神経さのようなものをよくつかんでいます。

新しい投稿者がさらに増えた印象です。次回の投稿も楽しみにお待ちしています。